

# 長柄の人柱伝説と 垂水の雉子噺伝説

二十回生 浅野 倉平

大阪市淀川区東三国町の大願寺に伝わる「長柄の人柱」伝説と吹田市垂水町に伝わる「雉子噺」伝説は、共に、人柱となった「巖氏II岩氏」と、そのひとり娘である「光照前」の事を伝えたもので、同じ内容の伝説である。

通常「伝説」と言うと、イメージ的には「口伝」による伝承という印象が強いが、この、長柄の人柱と雉子噺伝説は、江戸時代に出版された「撰津名所圖會」によって、文書としても後世に伝えられている。

「撰津名所圖會」は京都の町人、吉野屋為人がプロデュ

を難波江・難波入江・難波江の浦・三津江・御津浦とも和歌に詠まれたり、其江の中に岫々多くあり。今村里に古名の遺るもの多し。所謂南中島・北中島の中に、橋本・柴島・濱川口・小島等みな水邊の郷名多し。長柄橋は考徳帝豊崎宮の御時より、かの島々に掛け架して皇居への通路なり、今諺に云う、長柄橋は長さ一里ありしと云ひ傳へたり。一橋の名にあらざして、島より島へ架して、橋の數數多くあれども、地名によりてみな長柄橋といひならはしけり。委しきは長柄豊崎橋なるべし。古來よりも今の北長柄より豊島郡垂水庄に至るまでを、長柄の橋跡といふ。又一説には長柄川、今の船渡口の邊、橋の古杭遺れりとして、近年堀り出だし江府に上る。長柄豊崎宮、考徳帝崩じ給ふ後、大和の飛鳥宮に遷都し給ひ、橋の修理も怠り、風威の時江海渺茫して落損しれる事多し。其後嵯峨天皇の御時、弘仁三年夏六月、再び長柄橋を造ら

すして、江戸時代の寛政八（七六九）年から二年間をかけて、撰津の国の名所を繪画と文書で紹介をした通俗地誌で、いわば観光案内書であり、ガイドブックとしては、九卷十二冊に及ぶ大掛かりな出版物である。

その巻三（東生郡・西成郡）には「長柄橋跡」と「大願寺」を、又、巻六（豊島群・河辺郡）には「雉子噺」に付いて次の如く記されている。

## 撰津名所圖會 長柄橋跡

此橋の舊蹟古來よりさだかならず。何れの世に架け初て、何れの世に朽ち壞れけん。これ又分明ならず。橋杭と稱する朽木所々にあり。今田畑より掘出す事もあり。其所一擧ならず。予之を按ずるに、上古は大物浦よりひがしたえくらのさと、みなみ、うらえ、そねざき、東北江口里、南は福島・浦江・曾禰崎より、北は神崎川迄一面の大江なり。即大江の名もこれより出づ。又これ

しむ。人柱は此時なり。後世に速んで神崎川・長柄川・天満川の水路浴々として、江海みな變じて田園と成り、今の如く村里食田多し。桑田變じて海となるより大なる益ならんかし。

(注)人柱の事は豊島垂水雉子噺の下に見えたり。

## 撰津名所圖會 大願寺

佛性院村にあり。古刹にして初め佛性院といふ。又橋本寺ともよぶ。後世日蓮宗となりて、瑞光山と號す。本尊釋迦佛 閻浮檀金・長一寸八歩。近歳日慶上人當寺を再興。橋柱地藏尊 境内地藏堂に安置す。長五寸計り。寺記に云ふ。後一條院御宇、長柄の橋柱水底より揚がりしを、帝に貢りければ、佛匠に命じて地藏尊に造らし給ふ。

すなはちこのちはしもてら  
即 此地橋本寺の舊蹟なればとて、ここに淨利を建て安置  
すべき詔によつて堂舎建立あり、其頃四條大納言公任  
卿此尊影を拝して和歌を詠ず。

長柄江や藻にうづもる橋ばしら

また道かへて人わたすなり 公任

爾時此尊像微笑し給ふ。故に世に笑地蔵とよぶ。

鼠突不動尊 長一尺三寸計り。此尊京師姐小路不動尊  
と同じ。

### 撰津名所圖會 雉子囃

垂水村社頭西の方にあり。諺に言ふ、むかし長柄川に  
橋をつくるには、人ばしなくてはなりがたしとて、其人  
をえらみけるに、繼したる袴をきたるものをとらへて人  
柱にしづむべしと、官家よりおほせあれば、新關を立て  
てこれを改む。ここに岩氏長者といふ者あり。これをし

く。今の世までも繼袴を怠めるは此縁なり。光照前も、父  
の菩提を弔はんがため髪をそり、不言尼と號し、栽松寺に  
入り、其後山崎に不言尼寺を創しける。

以上、「長柄橋」「大願寺」「雉子囃」に付いて、「撰津名  
所圖會」を原文で紹介させて戴いたが、現在のこれらの場  
所はこの様になっている。

### 大阪府道十四号線 長柄橋

天神橋筋八丁目から柴島にかけて、阪急千里山線と並行  
して淀川に架かっている「長柄橋」は、私たちの馴染みの  
橋である。しかし、「撰津名所圖會」を目にするまでは「長  
柄橋」と云う名前に、この様な謂われがあったとは知らな  
かった。

尚、現在、この場所に架かっている「長柄橋」は、昭和  
五十八年に掛け替え工事が完了した三代目であり、全長は

らず袴の繼したるを着て通るに、關守とらへてゆるさず、  
つひに水底にせずむ。これによつて橋なりけり。かの岩氏  
にひとりの娘あり。容顔世にすぐれて艶しく、紅粉を囓  
さずして、色いつくしく、朝日にかゞやく國色なり、此ゆ  
ゑに世の人光照前とぞ稱しける。然るに成長までも  
不言ずして唾の如し。母悲歎かぎりなく、ふかくかくしけ  
り。ここに河内禁野といふ里の男、此女を戀ひて垂水よ  
りこれを迎ふ。辭しがたくや有りけん、禁野の家に行く。  
なほも不言ざること久し。夫怪しんで、女をつれて母の  
もとへおくりぬ。此囃を通るに雉子啼きければ、夫ねら  
ひよりこれを射る。於是女はじめて言ふて歌をよむ。  
ものいはじ父はながらの橋ばしら

なかずばきじも射られざらまし

とくりかえしこれを諷ふ。夫驚き、母のもとにゆか  
禁野につれかえり、悦びあへり、時の人雉子繩手となす

六五六・四メートル・幅員は二十メートルである。

### 大願寺 巖氏の顕彰

大願寺は、淀川と神崎川に挟まれた、JR東淀川駅から  
徒歩五分程の所にある。しかし、巖氏の顕彰は、その境内  
には無く、寺の北東側に隣接する飛地にある。この場所は  
長柄の人柱の建てられた跡と伝えられていて、ここに、昭  
和十一年（一九三六）に建立された巖氏の顕彰（巖氏の碑）  
があり、その傍に長柄の人柱の由来が書かれた説明文が掲  
げられている。その説明文に依ると、「長柄の人柱」の起こ  
りは、推古天皇治世二十一年（六一三）の時代と記されて  
いる。しかし、「撰津名所圖會」では、嵯峨天皇（七八六〜  
八四二）の時代とされており、人柱伝説の起こりに、約二  
百年の差がある。また、大願寺の顕彰の説明文では、巖氏  
は自らの意思で「人柱」になったとされているが、「撰津名  
所圖會」では、たまたま通り掛かった巖氏が「お役所が人



柱として指定した、継をした袴」を着用していた為に「人柱」とされたと、なっているなどの相違点が見られるが、その他の内容については「摂津名所圖會」に書かれている事とほぼ、同じである。

—垂水町の雉子噺石碑—

垂水町一丁目十五番地、ここは住宅地のご真ん中である。そこに、近代上方の儒学者である近藤南州（一八五〇年～一九二二年）によって大正十年（一九二二）に書かれた「雉子噺石碑」がある。

碑文は漢字ばかりで、読み解くにはかなり厄介な文章であるが、「原文」と「読み」を併せて掲載させていただく。

原文

攝津豊能郡垂水村有一土坡曰雉噺坡上古松一株老緑翁鬱為數百年外物澗河横斷其南下流有長柄渡河廣水大不得架橋土

民常苦之相傳不理生人為橋柱則工事不成也村人岩氏某慨然挺身致命橋果告成矣民大德之某有一女姿容端麗以國色稱既長而不言人以為唾河内禁野村豪族某特聘為妻而女卒不言於是某携往將返之母家途上聽雉噺執弓矢一發獲之妻愴然作國詩述感蓋言雉噺而失身父言而罹厄以寓己不言之意也某乃大喜相携歸家全偕老之義是雉噺之名之所由起也某歿妻雉噺稱不言尼移居邑栽松寺祈其父冥福以終身後土民創不言尼寺于山崎云事實在弘明天長之際焉至挽近知者幾希村人恐古跡埋沒來乞余文將刻石建之松下余乃記其概以表父女之義烈且警世間薄行陋劣之徒

大正十年十月

伊豫 南州外史近藤元粹 撰 弁書

「読み」

摂津豊能郡垂水村に一つの土坡有り。雉噺と曰う。坡上に古松一株老いて緑をなすこと、翁鬱たり。數百年の外なる物か。その南に澗河横斷して流れ下る、長柄に渡河あれど



も、水大にして橋を架することを得ず、土民常に之を苦しむ。相伝して、生人を埋めざれば、橋柱則ち工事成らずなり。村民岩氏某慨然として身を挺して命を致すに、橋果たして成る。民此の徳を大とす。某に一女ありて容姿端麗なり。以て國色に称えらる。既に長ずるに言わず。人、以て唾となす。河内禁野村の豪族某、特に聘して妻となすといえども、女言わず。是に於いて某、携えて將に往きて之を返さんとし、母の家にいたる途上。雉の鳴くを聴きて矢を撰り一発にして之を獲す。妻愴然として國詩を作り感蓋を述べ。言に、雉も鳴かずば身を失わざりし、父も言わずば厄に罹らざりしならんと。以て己の言わざるを寓するの意なり。某大いに喜びて相携えて家に帰り、偕老の儀を全うす。是れ雉撮の名の起る所由なり。某歿するにおよび妻剃髮して不言尼と稱し、居を邑の栽松寺に移して、其の父の冥福を祈り、以て身を終わる。後、土民不言尼寺を山崎に創ると言う事実あり。弘仁・天長の際と言う。挽近に

建立された昭和十一年(一九三五)は第一次世界大戦(一九一四〜一九一八)が終結し、第二次世界大戦(一九三九〜一九四五)の勃発する間の準戦時であったと云う、この様な時代の背景も関係して究極の「自己犠牲」を美談としたものとも考えられる。

尚、垂水の雉子撮の碑の裏側には「大正十年十月建之 北大阪電気鉄道株式会社」と刻されているが、大正十年十月と云えば、同月二十六日、北大阪電気鉄道は、豊津〜千里山間を開通させ、又、豊津駅前から垂水神社一帯の開発した住宅地を「垂水馬場東住宅地」として売り出しており、垂水町に雉子撮の碑を建てたのは、北大阪電気鉄道が、観光地と住宅地の目玉として、雉子撮の碑を建てたとも推測される。

尚、雉子撮の実際にあつた場所は、現在、碑が建つてゐる所より、もう少し西寄り(江坂方面)であつた様だ。

至り知る者希なり。村人古跡の埋没を恐れ、来りて余に文を乞ひ、石に刻して松下に之を建てんとす。余の記は其の概を以て父女の義烈を表し、且つ世間薄行陋劣之徒に警せんとす。

「江戸時代の摂津名所圖會」・「大願寺の長柄の人柱の由来が書かれた説明文」・「垂水の雉子撮石碑」の内容は、何れも、ほぼ同じであるが、雉子撮石碑では、人柱となつた岩氏は「慨然として身を挺して命を致す」とあり、大願寺の顕彰の説明文と同様、自らの意思で人柱になつた様に記されており、この点では、先に記した様に「摂津名所圖會」との違いが見られる。

この相違に付いては、垂水の雉子撮石碑が建てられた大正十年(一九二二)は、日清戦争(一八九四〜一八九五)・日露戦争(一九〇四〜一九〇五)の後、又、大願寺の顕彰が

#### ―垂水町の栽松寺と明誓寺―

「摂津名所圖會」には「栽松寺」に付いては次の如く記されている。

垂水村たるみづらにあり。標榜山へうぼうさんと號す。いにしへは伊和寺いわけらといふ。  
[南郷春日舊記]に見えたり。本尊觀世音ほんぜんくわんぜおん 聖徳太子しやうとくたいし  
御作。寛永年中くわんえいねんちゆうちゆうちゆう 中興す。永享元年えいきやうげんねん 二月の記を得て  
什物じぶつとす。ここにも長柄橋柱ながのへしはしらといふあり。長さ一尺五寸しやくごすん  
三分。

栽松寺は禅宗のお寺であつたが、明治の初め廃仏毀釈により廃寺となつてしまつた。しかし、その場所は、垂水の西とされているだけで、現在、不明とされている。廃寺の際、本尊の觀世音菩薩は、近くの浄土真宗本願寺派の黄龍山明誓寺(垂水町二丁目十番地二)に引き継がれて、同寺の本堂の右端に祀られている。禅宗のお寺のご本尊を浄土

真宗のお寺が、どうして引き取ったのか、と、言う事であるが、明誓寺のご住職のご母堂のお話では、明誓寺は、今から四五〇年ほど前に禅宗のお寺として開山されたが、その後、浄土真宗に改宗された。昔は、お寺の改宗というのは良くあったかと言う事だが、その様な経緯を伺うと、裁松寺が廃寺となった時に、ご本尊が元禅宗の明誓寺に引き取られた事に納得が行くような気がする。

#### ―不言尼寺―

「摂津名所圖會」と「雉子巖石碑」に記されている不言尼寺に付いては記録が殆ど見当たらないので良く判らない。

しかし、八幡市橋本平野山（京阪電車橋本駅下車十分）に在る「講田寺」には、不言尼寺に付いて、次の様な話が伝えられている。

稱名山不言寺（ふごんじ）は、光照前が名を浮名立戒尼と改めて裁松寺入ったが、その後、山城国乙訓郡山崎の里に

草庵を結び、そこに隠棲した。その後、この草庵は稱名山不言寺と呼ばれるに至った。その、おおよそ二百年後の、後一条天皇（一〇〇八年〜一〇三六年）の時に、かつて人柱を立てた長柄の朽ちた橋杭が水底から見つかったので、これを天皇に奉ったところ、天皇は、その一片に身の丈二寸七分七厘のお地藏菩薩を彫らせて「これを不言寺に持って行き岩氏の追悼菩提の法要をするように」と、四条大納言公任を勅使として遣わしたとの話が伝わっている。

その折に公任が詠んだ和歌は、「摂津名所圖會」の大願寺の項に記されている和歌と全く同じで、やはり、この和歌を聞かれたお地藏さんはほほ笑まれたとあり、それ以後、このお地藏さんは「橋杭の笑い地藏」として人々の信仰を集めたと云う事も「摂津名所圖會」に書かれている事と同じである。

しかし、講田寺に伝わる話には続きがあり、その後、何時しか不言寺は荒れ果てて、ついに廃寺となってしまった。

廃寺になった時代は判らないが、それから長い時を経て、明治三十七年、講田寺の時の住職が、このお地藏さんを不言尼寺から引き継いで、預かっていた宇治の興聖寺より、淀川を見渡すことのできる八幡市平野山の講田寺にお迎したとの事で、現在も同寺の地藏堂に祀られている。

このお地藏さんは、大願寺のお地藏さんより少し小さいが、いずれのお地藏さんも、後一条天皇と四条大納言公任が絡んだ、全く同じ内容のお話になっている。

尚、講田寺のご住職の話では、不言尼寺の場所に付いては、山崎に在ったという事以外、詳しい場所は判らないとの事であった。

伝説と云うものは、似たような話が沢山あると聞いているが、これは、まさにその通りであると思われる。

―二十回生垂水町・円山町・花壇町を歩く―



二十回生は、本年三月二十九日(土)定例の千里山を歩く会を実施しました。

今回は、第六回目となり、―知っているようで意外と知らない―「垂水町・円山町・花壇町を歩く」と云うキヤッチ・コピーのもとに、次の様なコースを歩きました。

豊津駅―豊津駅交番横 上之川・糸田川の改修碑―明誓寺  
―上の川旧水路跡―雉子巖石碑―垂水神社―円山町―花壇町  
町跡―関西大学西門―関大専用エスカレーター―関大内  
レストラン「チルコロ」にて昼食。歓談後、解散。

参加者は二十二名でしたが、当日は天気と桜に恵まれ、  
楽しく歩いてきました。

今回の歩く会の目玉は「垂水神社」と「雉子巖」でしたが、  
垂水神社については宮司の竹内真哉さん(元吹田一中

で歴史を教えておられた竹内梅吉先生のお孫さん)に案内  
をお願いし、その他については荒木弘進君と私が案内に当  
たる事と致しました。しかし、「雉子巖の碑文」は結構難物  
で、読むことすら出来ず、結局二人で吹田博物館を訪れ、  
同館の吹田市教育委員会 文化財保護課 主幹 西本安秀  
氏に碑の読み方と解釈等についてのご指導を受けました。

又、大願寺・講田寺・明誓寺にも一人で訪れ、ご住職から  
話を伺ったり、資料を戴いたり、多くの方々の協力を賜  
りました。その結果、「長柄の人柱」と「雉子巖」について  
は、以上の如く、結構、面白い発見がありましたので、そ  
れらの事を皆様方にお伝え致したく、当会誌に掲載させて  
戴く事にしました。

以上

参考文献等

摂津名所圖會・大願寺の顕彰の説明文立て札・講田寺「長柄人柱笑地  
蔵尊の由来」の文